

## 論文審査の結果の要旨

2023年 1月 31日

申請者： DL2016-005 林 瑛

論文題目： 持続可能性日本語教育に基づく「日本概況」の授業研究

—中国の大学日本語教育における教室実践から—

申請者は、中国のある大学で「日本概況」（日本の大学の「日本事情」）を、持続可能性日本語教育の立場から検討した上で、新たな授業デザインを作成し、6回にわたって実践した。上記題名の学位請求論文は、それを含む一連の研究の成果である。この研究の背景には、中国の大学における教育改革がある。それは、知識重視型の教育から、学習者の人間全体の成長を促す教育への転換である。そして、日本語教育にも改革が求められ、日本語を学ぶことから、異文化間コミュニケーション能力の向上、ひいては「国際人材」の育成が社会的要請となっているという。また、日本と中国の社会の傾向として、グローバル化という大きな変動もある。このような背景の下で、申請者は、「日本概況」を、岡崎敏雄・岡崎眸による「持続可能性日本語教育」の枠組みで、先行研究の検討しながら課題を洗い出し、従来の教員主導の講義から、学生の能動的な学習と学生間の相互作用を重視する授業への転換を実践し、その有効性を検証した。

研究の基礎にあるのは、言語生態学と持続可能性日本語教育である。そこでは、言語の構造ではなく言語を用いた人間の認知活動に着目し、話者が言葉を通して、話者のいる環境にある対象を、能動的に、また他者との相互作用によって把握することを重視する。申請者はこの立脚点から、講義形式の授業を捉え直し、一方向的な講義ではなく、事前課題と教室での議論とグループ・ディスカッション、振り返りによって授業を構成した。また、扱われた事項は、ファッションや日本の日常生活、雇用など、学生が自分の状況と関連づけをしやすいものを選択した。論文中では、申請者の採った理論的枠組みについて、より踏み込んだ議論があってもよかったと思われる点もあるが、しかし、日本の現況を孤立した知識として教えず、学習者が生きる社会というコンテキストに関連づけられた内容によって学習者の思考活動を活性化する授業をデザインしたことは、授業改善の試みとして評価できる。

研究全体の過程を振り返ると、着実に研究を進めていたことがわかる。先行研究の振り返りと研究課題の提示（第3章）では、「日本概況」に関する先行研究を適切に分類し、授業形態や授業内容、学習観、教室実践など多くの問題点を挙げた。その中でも、「日本概況」の授業改善の研究に、学習者の授業参加まで考慮した研究がないことを指摘しており、それがこの研究の独自性の基礎となっている。

そして、持続可能性日本語教育のこれまでの実践研究も踏まえ、みずからの課題を、「日本概況」授業改革の実態、持続可能性日本語教育としての「日本概況」授業の実施、持続可能性日本語教育としての「日本概況」授業に対する受講生の評価と定めた。これは、申請者の実践が単なる試みに終わるものではなく、検証を経て今後のさらなる実践と研究につながるものと考えてよいだろう。以下、各研究課題について述べる。

研究課題1（第5章）では、「日本概況」の実態を調査した。中国のある大学の「日本概況」についてインタビューと授業見学を行い、その結果、授業形態と授業内容について持続可能性日本語教育による改善の余地があることを明らかにした。先行研究の批判的に読むだけでなく、実際の授業を担当教員の協力を得て調査したことによって、みずからの研究方法の可能性を見出すことができています。

研究課題2（第6章）は、論文の中心に位置づけられる研究で、持続可能性日本語教育に基づ

く「日本概況」の実践である。ここでは、先行研究も参考に、2年生を対象に6回の授業を行い、事前課題と授業中の談話、授業後の振り返り記録を資料として得た。申請者の授業デザインで興味深いのは、各回の内容である。内容そのものは、グローバル化社会での日本事情であり、この科目の範囲を逸脱しているわけではない。しかし、上述の通り、申請者が選んだのは、学生にとって身近な事柄（例えばファッションやコンビニ、雇用）であり、学生が自身の周囲の状況と関連付けられる事柄である。それは、日本事情を、孤立した情報としてではなく、学生が生活しているコンテキストの中で学び、議論するためのものである。そして、授業中の議論に中国語の使用も認めた点も評価してよい。外国語を外国語で学ぶことは広く行われている方法であり、その点に申請者が異議を唱えるわけではないだろう。しかし、申請者の授業デザインには、持続可能性日本語教育に基づいて、語学力ではなく思考力を育成しようとする姿勢が見られる。これらを総合的に見ると、まだ明確な形にはなっていないところがあるものの、従来の授業からの転換を見て取ることができる。そして、6回の授業の結果、参加した学生が、学生間の積極的な議論によって、授業のテーマについて当事者性を持って、積極的・能動的に考えたことが考察されており。授業全体を通してみれば、学生の態度や議論の展開にはばらつきがあるだろうが、申請者の意図した実践が行われたと考えられる。

研究課題3（第7章）は、申請者の授業の検証である。申請者、受講生11名に対して半構造化インタビューを行い、それを文字化した上で、KJ法を援用して分析した。その結果、授業で扱った事項と授業方法の双方について肯定的な評価を得ることができた。その中には、知識と自分が置かれた状況との関連性や、能動的な思考、グループ・ディスカッションによる学生同士の相互作用などが評価されている。同時に授業の問題点も明らかになったが、今後の実践に活かされるものと考えている。

総じて言えば、これら3つの研究課題によって、持続可能性日本語教育の視点から「日本概況」の授業改善の一つの可能性を示すことができたと評価できる。その一方で、努力の余地がある点として審査員から指摘があったのは、資料の提示とその考察で主観的と思われる記述や、質的分析の方法の説明に厳密さが欠けていたことと、参考文献・資料の誤解と思われる点が見られたことがある。また、日本語表現や体裁などに修正すべき点が散見されたので、修正が必要である。

申請者の研究には、今後の発展が十分に期待されるものがある。しかし、授業方法が一般的なものとして広く用いることができるものなのか、授業における教員の関わり方はどうあるべきか、学生の活動をどのように評価するかなど、残された課題も少なくない。今後の研究の発展に期待したい。

審査員（主査） 吉田 朋彦

---

審査員（副査） 宮 偉

---

審査員（副査） 楊 峻

---